東京あさぼらけ

校訓
至誠励業
剛健成風
操守堅固

発行所
東京福中・福高同窓会広報委員会
〒160-0023
新宿区西新宿7丁目20番地16号
ダイカンプラザシティⅡ304
原口法律事務所内
TEL　03-3361-9633
FAX　03-3369-6664
Eメール　fukkou@attglobal.net

《活躍する同窓の仲間たち》

夢の分子コンピュータ開発へ
分子の大きさの文字や絵を描けるまでに

次世代技術の研究で世界をリード

ナノテクの“未知案内”役、高校18回・松重和美さん

さまざまな面で壁にぶち当たり、自信喪失状態に陥っている今の日本――。だが、どっこい、元気いっぱい世界をリードしている分野があります。代表格がナノ（10億分の1）テクという分子レベルの超微小世界の技術開発。現在のコンピュータの100万倍の情報容量を持つ分子コンピュータや優れた同時並行処理能力のＤＮＡコンピュータの開発、さらには再生医療の発展にもつながる夢の最先端技術です。その世界の先頭に立つ高校18回（昭和41年卒）で京都大学大学院教授の松重和美さんに聞きました。

技術的に限界が見えてきた現在のコンピュータ

米国では、クリントン大統領時代の早い時期から「ポストＩＴ」としてナノテクが国家戦略として位置づけられ、大きな予算が割かれてきたといわれます。

そんな中で、同窓の松重さんを先頭にした日本の研究者がこの分野で世界をリードしているのは、誇らしいことです。

そこで、まずナノテク、とりわけ松重さんの研究の中心テーマである分子コンピュータの「イロハ」について、素人の私たちにもわかるように解説してもらいました。

「現在の半導体素子の微細化、すなわちコンピュータの小型化はまもなく技術的に限界が来ます」と松重さんは指摘します。

それは、シリコン基板に光学的に電気回路を作成する今の技術では、光の波長の関係で微細化には限界があり、その壁が見えてきているのです。

これをどうやってブレイクスルー（突破）していくか。それが、松重さんが取り組んでいる分子ナノエレクトロニクス技術です。一つ一つの有機分子の電気特性を利用して、これまでよりケタ違いに小さい全く新しいデバイス（素子）を創り出そうというのです。

ここでカギを握るのが、電気回路の素子として働いてくれる有機分子の合成・操作技法の開発です。この有機分子の操作技術で松重さんの研究は先端を走っており、写真のように分子を電気的に動かしたりくっつけたりして、分子大の大きさの京大という文字や鳥居のマークを描けるところまでコントロールできるようになっています。

出張の合い間に編集部のインタビューに気さくに語ってくれた松重さん（都内のホテルで）

人類の進歩のカギを握る新技術

この先に見えてくるのが、現在のコンピュータの100万倍もの記憶容量を持つ分子コンピュータなのです。もっとわかりやすく表現すると、例えば今は10数曲がせいぜいのＣＤ１枚に数万曲も入るというスケールです。さらに、紙のように巻けるテレビやコンピュータ、そして、耳の中に入れると外国語が母国語になって聞こえてくる超小型同時翻訳機や脳に埋め込んで視覚などの障害を克服できるようになるといった「人間にやさしいコンピュータ」も実現するのです。

つまり、人類の進歩のカギを握っているといっても言い過ぎでない新技術なのです。（次ページの分子コンピュータのイメージ図を参照）

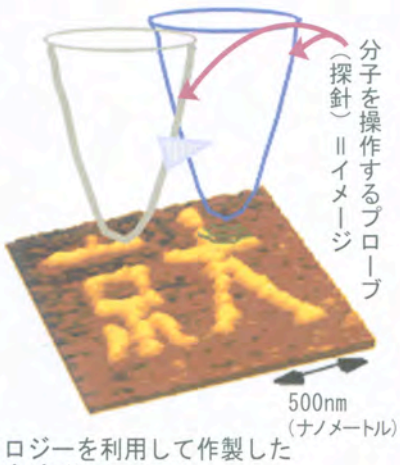
では、その実現はいつのことか――。松重さんは、「まだ、２合目か３合目」と言います。これから、10～20年かかるかもしれない息の長い、根気のいる研究なのです。

しかも、従来のような１つの分野だけにとどまった研究のやり方では全く歯が立ちません。物理、化学、工学など多くの分野が、専門の壁を超えて協力し挑戦しなければ実現は望めません。

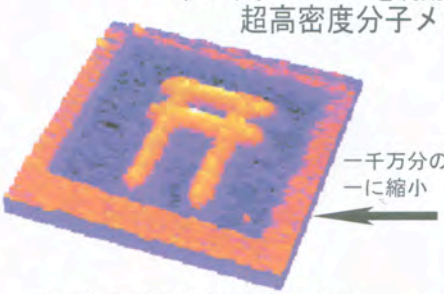
ここでモノをいうのが、いろいろな分野をつなげたり、調整できるまとめ役、牽引役の存在で、松重さんはそれにぴったり。

九大理学部卒業後、工学部に移り、しかも米国留学、母校九大工学部教授、そして京大工学部教授と、活躍の舞台と研究テーマを次々と発展させてきただけでな

（次ページに続く）



ナノテクノロジーを利用して作製した
超高密度分子メモリー



写真と次ページの分子コンピュータのイメージ図は、いずれも松重さん提供。
なお、参考までですが、宮島の鳥居の高さは約16メートル。

随想

師の恩の有難さ

名誉会長　草場良八（中学22回）

わたくしの中学時代の思い出を紹介して、教育に関する感想を綴ってみたい。

わたくしどもは、その先生に文法を教わった。怖い先生だった。厳しい先生であった。しかしクラスの誰一人、先生に殴られた者はいない筈である。わたくしの記憶にはない。それでも怖い先生だった。

文法の予習や復習をした覚えは一切ない。ところが現在でも、文章を書くとき、動詞の活用など、自然に脳の中に流れてゆくようになっており、「植ゑ、据ゑ、餓ゑ」は「わ行のゑ」などと今では必要のない用法なども、ひとりでに湧き出てき、そのたびに遠い昔を懐かしんでいる。

福沢諭吉の『福翁自伝』には、次のようなエピソードがある。

諭吉が大阪の緒方洪庵の適塾で蘭学を学んだことは有名である。あるとき、諭吉が腸チフスに罹り、中津藩の蔵屋敷で寝ていると、緒方先生が見舞いに来られた。先生は諭吉の容体を診たのち、「乃公(おれ)はお前の病気をきっと診てやる。診てやるけれども、自分で処方することはできない。何分にも迷うてしまう。この薬あの薬と迷うて、あとになってそうでもなかったと言ってまた薬の加減をするというような訳けで、しまいには何の療治をしたか訳けが分からぬようになるというのは人情の免れぬことであるから、病は診てやるが執匙は外の医者に頼む。そのつもりにしておれ」と言って、先生の友人の医者から薬を貰うことにし、先生はただ毎日来て容体を診て病中の摂生法を指図するだけであった。

諭吉はこの件について、「今日の学校とか学塾とかいうものは、人数も多くとても手に及ばないことで、その師弟の間はおのずから公(おおやけ)なものになっている、けれども昔の学塾の師弟は正しく親子の通り、緒方先生が私の病を見て、どうも薬を授くるに迷うというのは、自分の家の子供を療治してやるに迷うと同じことで、その扱いは実子と少しも違わない有様であった。後世だんくに世が開けて進んで来たならば、こんなことはなくなってしまいましょう」と述べている。

前述のとおり、わたくしにとって怖かった先生は、おそらくクラスメイトにとっても同じことだったのではないか。あの怖さは、厳しさ故であろう。厳しさは、先生の教育に対する情熱のほとばしりの所為(せい)であろう。教え子を自分の子と同じように、一人前にするために教えようとする情熱以外の何物でもなかったのではないか。師の恩の有難さを感じる次第である。

あの時から六〇年の歳月が過ぎた。諭吉が腸チフスを病んだのは、それよりもさらに八〇年以前のことである。諭吉が言うように、師弟の関係は濃密さがなくなっていくのが時代のおもむくところであろう。しかし、先生方の教育に対する情熱は、教え子を啓発するとともに、その中に何かの種子を残すことによって、尊い師恩を感じる、豊かな稔りをもたらすのではなかろうか。

同窓会は、いろいろな事を語り伝える場として、それを土台に明るい明日を築く準備の場として、各位に利用されることを期待してやみません。

ナノテク研究にまだ予算があまり付かなかった時代に、研究に必須の走査型トンネル顕微鏡を手づくりしたりといった先駆者としての苦労の経験が、松重さんを異分野を融合させなければ見えてこない「ナノの世界」「大きな夢の世界」への“未知(道)案内”役にしたに違いありません。

実際、松重さんは、異分野の融合や産学連携などによって新しい学問領域の創造や新産業の創出、大学発のベンチャービジネスなどを目指して設立された同大学の国際融合創造センター(http://www.iic.kyoto-u.ac.jp)とベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(http://www.vbl.kyoto-u.ac.jp)両施設のセンター長・施設長も務め、とかく一国一城の主になりがちな教授陣、研究者、利害の対立する企業を見事にまとめあげています。

その実績から、政府の知的財産戦略会議の専門調査会委員にも任命され活躍中です。

再生医療などの大きな夢が広がるナノの世界

ナノテク研究は、分子コンピュータに関する分子ナノ工学にとどまりません。バイオナノ工学では、一人ひとりの患者さんに合った病気の治療薬の開発や臓器の再生医療、さらには現在のコンピュータが苦手とする効率的な通信経路を決めたり、暗号など複雑な問題を解くDNAコンピュータの開発が期待されています。

大きな夢が広がるのが、ナノの世界なのです。

自然と人間にやさしい科学でなければダメ

それだけ可能性の大きいナノテクだけに、人間、人類、ひいては地球全体への影響も大きいものが予想されます。倫理の問題や技術開発の判断基準など、科学と科学者のあり方、人間社会のあり方までが問われることになるわけですが、松重さんは「自然と人間にやさしい科学でなければなりません」「人間としてのベースに深いものがなければ、いかに科学が進歩してもダメです」と強く指摘します。

そして、「例えば、今取り組んでいる研究の一つですが、有毒な鉛を使わないハンダの開発や、水銀を使わない蛍光灯の開発など、環境というファクターを意識した技術開発が求められているのです」と、私たちが当たり前のことのように思い込んでいる技術でも、常に人間や環境といったファクターを考えながら、その真の価値を見直していく必要があること、そうした視点を持つことの大切さを語る松重さんでした。

※

ぜひ母校での講演を

東光中出身で、福高時代は「物理部の部長をしましたが、どちらかというと目立たない生徒でした」と笑う松重さんは、若い同窓生たちと、学齢期の子供を持つ同窓生に「あまり妥協しないで、自分のやりたいこと、やるべきことを考えていれば、それなりに道は拓けるものです」とアドバイスのメッセージを送ってくれました。

こうして世界最先端の話を同窓生だけが聞かせてもらうのは勿体ない。在校生たちのために母校で講演などされる機会を、ぜひつくってほしいものです。

ボランティア活動２話

定年後、カナダでのボランティア通じ交流を楽しむ
病院奉仕やチャリティ・イベント そして盲人の方のサポートも

藤田　公市（中学23回）

私は引退した鉱山技術者です。日本の会社を55歳で定年退職。その後、縁あってカナダのカルガリ市でコンサルタントとして10年。その後もカナダの家を維持しているので、最低年２回カナダとの往復を続けています。その私に編集氏から何か書けと言われて些かならず困惑しましたが、考えた揚げ句、引退後のボランティア人生を書いて見ようかと思います。

日本での現役時代はボランティアの仕事は皆無に近い仕事人間でした。時間的余裕もありませんでした。

カナダでは社会全体がボランティアに満ち満ちています。そんな環境の中で、二世の友人の強制もあり、日本語学校での大人のクラスを教えることになりました。このクラスが出来たのが１９８５年で、88年の第15回冬季オリンピック開催に備え、主として日系人のボランティアを目指す人々を対象にするものでした。

いよいよボランティアの募集が始まったとき、教え子と言うよりも、親しい友人になった人たちが応募するのを見ていて、私も傍観しているわけにはいかなくなりました。

そこで、私も応募しました。２回のインタビューを受け、通訳として採用され、形だけですが日本語グループではリーダーということにされました。上から下までの揃いのお仕着せが支給され、数回の事前訓練などもありました。本番では私は滑降の会場ナキスカ（国際会議場カナナスキスの近く）に配置されました。大会中は身分証明カード（**写真**）を首に下げ、市内の公共交通機関は一切無料、朝食、昼食は支給されました。早朝から夜まで、全く無料の奉仕でしたが、私の一生の中では最も思い出深いものの一つです。

カルガリでは、ジャンプやルージュが行われた場所をオリンピック・パークとして有料で公開していますが、私たちボランティア参加者は、生涯入場料無料となっています。なお、場内に映写室があり、その正面の大理石の壁には全ボランティアの名前が彫り込まれています。私の名前もあります。

日本ではボランティアの機会は少ないのが実情ですが、５年前に三井Ｖネットというグループが結成され、私もそれに参加しました。以来、毎週１回の東京広尾の日赤医療センターでのボランティアに参加していますし、東京チャリティ協会の行うイベントでの奉仕などにも可能な限り参加しています。

また、これは全く個人的なものですが、やはり５年前に偶然お会いした、当時大学２年生の全盲の女性を、色々な形でお助けしています。初めは点字で書いたり、本を読みテープに録音してあげるなどしていました。

しかし最近は、お互いにパソコンを使うことで、私が送るメールを彼女が点字で読むことも出来るし、音声に変換して聞くことも出来ます。彼女からもメールで送信が出来るという状況になり、さらには、日赤のボランティア仲間の中に雑誌『文藝春秋』を毎月点訳しておられるグループがあることが分かってからは、その点訳をメールで送信して頂き、私からメールで転送するという作業を続けています。彼女は大学卒業後は千葉県庁に職を得て千葉市でのマンション暮らしですが、私との交流は絶えません。

私も今では77歳。残り少ない人生、若い人たちの重荷にならないよう、体力の許す限り自分なりに出来ることはやっていこうと考えているところです。

最近、地元の中学で行われる大人のための英会話教室なるものがあり、その助っ人を頼まれて数回出席しました。ここでも地域の方々との新しい交流が生まれそうで楽しみにしています。特にメル友が出来るのが楽しみです。カナダのメル友との交信も楽しみですが、日本のメル友が増えるのも嬉しいことです。

国際交流15年
原動力は「たとえ習慣・宗教など違っても真心で接すれば相互理解が」の実感

久保　和子（高15回）

15年前のある日、娘が中学から帰宅するなり「外国の人泊めてもいいでしょう、もう決めたんだから」。この一言が私の国際交流ボランティア活動の入り口となりました。

当時殆どの市民が外国人と接したことのない千葉県・市原市（サッカーＪリーグのジェフ市原で知名度が上がった）へニュージーランドのパパクラ市から123名が１週間のホームステイに来るというのです。

そして、我が家には１人の女子高校生がニコリともせず現れました。彼女は初めての海外経験でした。見る物・食べるものすべてが奇異に写ったようです。我が家の食卓には肉料理・和食が並べられ、筆談交じりの生活の始まりです。なにしろ“ａ（エイ）”の発音が（アイ）であり、Ｄａｙはダイです。３月３日はガールズダイで「女の子が死ぬ日」となりかねないのです。

また、到着後数日間「お腹いっぱいだから食べたくない」と言って夕食に出てきません。何が気に入らないのか随分気をもみましたが、意を決して「どうして食べないの？」と聞きました。「宗教上肉はダメ、和食は嫌い。昼間みんなと観光している間にスナック菓子を食べているからお腹いっぱい」との返事。でも、その後少しずつ家族に溶けこんでいきました。習慣・文化の違いを痛感した１週間でした。

半年後こちらから大挙してパパクラに行くことになり、私も娘と参加しました。帰国後、何の挨拶もなかった彼女があちらの協会の人に頼み込み、我々のホストファミリーになってくれていたのです。日本では見せたこともない笑顔で家中を案内し、欲しい物・足りないものあれば遠慮なくとのこと。

その夜は親戚の人たちも集まって歓迎パーティーでした。お土産のけん玉にうち興じ、ピアノやフルートでもてなしてくれた彼女とその妹。

帰り際にママから「あんなに内気で気難しい子が日本から帰ってから見違えるように明るくなった、１週間大変だったでしょう。ありがとう」と言われ、感激のあまり涙がこみあげてきました。

この最初の往来で、たとえ習慣・文化・宗教が違っても真心をこめてオープンに接すれば互いに理解し合えるとの実感が、その後15年間も国際交流ボランティアを続けてこられた原動力となっています。

昨年の裏千家北米大会で交流の輪を広げる久保さん（前列右から２人目）

姉妹都市・姉妹県と交流の輪も広がり、最近もロサンゼルスでの裏千家北米大会に参加し、この日本独自の文化が意外に広く深く異国に浸透していることを実感して帰国したところです。

Memories

唯一の米国留学の道だったAFS
あのキューバ危機では防空訓練体験
若者よ！海外を知り、国際連携を

伊藤　博彦（高16回）

私は福高２年生の時にＡＦＳ(American Field Service)留学生試験に合格し、３年の一学期終了後（１９６２年夏）から１年間、アメリカ・ヴァージニア州キングジョージ高等学校へ留学しました。当時は海外渡航制限・外貨規制下にあったため、アメリカ側の無償招待によるＡＦＳ以外には高校生の留学の道はない時代でした。確か、福岡県からは４名（修猷館２名、中央１名、福高１名）、九州から７名、全国から120名ほどが一緒に留学したと思います。

ＡＦＳとは第２次世界大戦の頃には傷病兵治療に活躍したアメリカの組織で、戦後は平和な世界再興へ向けて世界中の高校生をアメリカに１年間無償で留学させる活動をしていました。

私がその９期生であったということは、戦後10年もたたない昭和28年から米国は日本人高校生を招待したことになります。

紙面の都合で留学生活の詳細の記述は控えますが、概略以下のような内容でした。

渡航費用はアメリカ全土から寄せられた寄付金を預かるＡＦＳ本部が負担、衣は持参したが食住はホストファミリーが提供、学校関係費用はすべて学校側が負担してくれました。

学校では９月からの新学期に高校３年生として編入、翌年６月に卒業。学校挙げて歓迎してくれ、私が持参した福高生の様子を卒業アルバムに掲載してくれたりしました（**写真上**）。

日本の高校に比して、“自由で豊か”な高校生生活を体験しました。

言葉が中心の科目（英語、歴史）では苦労したものの、言葉より計算や式が中心の数学や化学などでは良い成績を修めることができました。

留学中には、ソ連がミサイルをキューバに持ち込もうとし、アメリカがこれに反対し、核戦争の恐れが高まった、いわゆるキューバ危機があり、学校でも防空訓練をしたほどに緊張した時もありました。

帰国前には各国から来た全米中のＡＦＳ留学生がホワイトハウスに招かれ、ケネディ大統領からスピーチを頂きました（**写真下矢印**）。伊藤写す。同大統領がダラスで銃弾に倒れたのは、その年の秋のことです）。

帰国後は３年の２学期（１９６３年秋）から福高３年に復学し、１年後輩だった人たちと一緒に第16回生として卒業。その後、大学を終えて日本航空に就職したのですが、やはりアメリカ留学による海外志向が職業選択に影響を与えたように思います。留学から約30年経過後の91年から94年にかけてニューヨーク勤務となり、アメリカ人スタッフと一緒に働いた際、幸いにも彼らとのコミュニケーションや価値観上の大きな問題もなく働けたのは留学時代に得た何かが作用したものと思われます。

駐在中にはニューヨークから車で第二の故郷ヴァージニアを訪問しました。

ホストファミリーの両親はすでに他界し、残る家族も他州へ転居していることは承知していましたが、懐かしくなり当時の家を訪ねると、ちょうど改修工事をしていました。玄関先にいる大工さんに許しを得て家の中に入り居間へと進むと、そこにも中年の大工さんがいたので、「昔ここに住んだことがある者ですが、中を見ていいですか？」と言うと、「ＯＫ」と返事して振りかえった彼が、「Aren't you Hiro?（当時呼ばれていた私の名前）」と言うではありませんか！

居間にいたのは実は大工さんではなく、私が30年前にベビーシッターをしていた隣家の子供だったのです。その子供が成人し、私が住んだ家を購入、大工さんと一緒に改修作業を手伝っていたのです。

当時は日本人を見るのもめずらしかったアメリカの田舎町でもあり、彼も私のことをよく覚えていてくれたのですが、まさに映画の一シーンにもなろうかという30年ぶりの邂逅でした。

※

留学の話を仕事と関連付けるようで恐縮ですが、たとえどんなにＩＴ革命が進んで情報が行き交い、現地を訪れることなく仕事も出来るようになったり、世界が狭くなったとしても、直接的な人事交流の意義は大きいと思います。その意味で、海外へ出かけることは世界の発展と相互理解のためにもまことに重要なことです。幸いにも渡航制限など無い現在ですので、後輩の方々も大いに海外へ眼を向け、出かけて欲しいと思います。政治・経済・文化すべての面で、日本だけでは生きていけない時代です。

この海外諸国との連携が必須な時代こそ、海外を知る意義は大きいのです。

ペシャワール会への募金ご支援に感謝します

乃美　吉江（高８回・在福岡ペシャワール会事務局）

東京福中・福高同窓会の皆様お元気ですか。昨年４月の総会では、ペシャワール会のための募金活動にご協力下さいまして有り難うございました。お陰様で95,206円もの過分なご送金を戴きました。

当日の募金活動の実現を積極的に推し進められた昨年の当番幹事の方々、その方向を側面より支えられた役員の皆様、そして当日、総会に参加されたおひとりおひとりの温かなご支援のお気持ちを強く感じています。

昨今のニュースが伝えますように、アフガン国内は未だ混沌とした状態が続いています。現地でのペシャワール会の活動は、医療活動と並行して主に東部において水源確保のための井戸掘りと、自給自足を促す農業復興が勧められています。

農業復興は旱魃に強い農作物の栽培を目的に、専門家を日本より招き綿密な計画が立てられ、もうすでに実行されている部門もあります。

中村哲さん（高17回）も相変わらず多忙を極め、現地と日本を往復の日々です。

中村さんに代わりまして心より厚く御礼申し上げます。

「福高新聞」創刊の思い出

生徒提起から11年がかり、配布の感動今も

庄嶋　厚生（高9回・在福岡）

「福高新聞」創刊は、初代新聞部部長としてかかわった私にとってまさに青春時代の思い出だけに、古い記憶や資料をもとに何とか筆を進めてみました。

福高新聞の創刊は昭和30年11月18日です（写真がその創刊号。１面の日付だけがなぜか10月17日になっています）。何日も徹夜を続け、ようやく生徒の手に配布できた時の感動は何にも例えようのないものだったのを今でも憶えています。

新聞部の設立は、昭和30年5月の生徒総会で承認され職員会議で何回となく議題となり、5カ月後にやっと許可されました。新聞部の創設が福高生の間で問題として提起されてから実に11年目のこと。何度となく生徒総会で決議されながら、それまで実現できなかったと聞けば皆さまもびっくりされたでしょう。

私は舞鶴中学時代に「舞鶴新聞」の発行にかかわっていたので、福高に入学したとき、当然「福高新聞」があるものと思い、入部しようとしたのですが、新聞部がないと聞いてびっくり。

そこで、1年生の私は同級生たち（片山君、白石さん、藤崎さん、田中さん）と語らい準備会を発足し、生徒会や職員会議にお願いを始めました。しかし、初めは全然取り合ってもらえませんでした。その時、3年生の久本先輩も新聞創刊の努力を続けられたという話を聞き、その指導をいただき一歩ずつ前に進めていきました。

まず、生徒総会の議案として取り上げてもらうため、総務に働きかけをしました。しかし、学校側の許可が出ず、なかなか取り上げられませんでした。学校側の考えとしては、数年前に始まった原水爆禁止運動が、大学から高校へと浸透し始めており、社会研究部や新聞部といった組織はその中心になると思ったようでした。

政治活動とのかかわりを持つのを心配して、火種は作らないほうがよいというのが学校側大多数の意見であったように思います。

私たちの準備会は福高新聞を生徒会の中に位置付け、自治の意識と文化の面から捉えていたので、生徒会活動が活性化し、体育祭や文化祭などの活動を全生徒の自立的活動として発展させたいと考えて取り組んでいきました。新聞は多くの人たちによって作られるのですから、一個人の政治的思想に偏向するようなことはないと主張しました。

度重なる学校側との話し合いの結果、1年間は試行期間とするという条件でようやく許可されることとなりました。そして、学校側との対立点が具体化したのが、3号発行のときでした。

福高新聞
新聞部設立を祝して
10月25日設立なる
刺激激励の燈明に
愛される新聞たれ
中立の立場で進む
創刊を祝して

部としての主張をする「明暗」というコラムの次の一文が物議をかもしたのです。

『九大合格者125名　福高始まって以来の大量入学であろう。「不作だ、不作だ」と生徒の面前で言っていた先生も大変な喜び方である。しかし、合格者の四割近くが文学部、勿論本当に希望者が多かったのなら問題はないが、入学率を上げるため？　に無理に変更させられた等と云う話がちらほら聞こえると、受験競争もここまで来たかと寒気がする。しかも全般的に、必ずしも良い結果とは云えない。現三年生の見方はかなり懐疑的である。受験勉強と云い、或いは伝統という工場の中で、大量生産された人間像について、云々』

この一文で、私は職員室に呼び出され、何を根拠に書いたのかと追及されました。これで創刊早々に廃部や発刊中止になってはと心配しましたが、何とか切り抜けることが出来ました。

当時は部室もなく、文芸部や映研部の部屋などに仮住まいをし、また、地下の食堂を借りて活動するなど大変な苦労の連続で、特に予算が他校の年間10万円以上なのに比べ3万円しか貰えず、広告収入で大部分を補うために、広告取りに多くの時間を割かねばならないなど、財政面での苦労は16、17歳の私たちにとっては一番思い出に残る苦労であったように思います。

題字の「福高新聞」の文字は当時の書道の八尋武人先生に書いていただいた格調高いもので、朝日や毎日といった全国紙より立派だと、西日本新聞の方から褒めていただいたことも思い出します。

博多だより

東区、今これから一層重要さ増すその役割

東区長　松永　徳寿（高18回）

福高生の頃、通学区域の北限は新宮町辺りであったと記憶するが、今は宗像市・郡に及んでいる。在校生のうち東区の生徒は4割近くを占めているようだ。当区は今、人口27万人、県下最大の行政区である。

休日立花山によく登る。健康と、減りがちな夫婦の対話の穴埋めのためである。この山には、かつて博多押さえの城が築かれ、戦国期には大内家・大友家などの激しい争奪の場となった。それだけに山頂からの眺望は雄大で素晴らしい。博多湾を眼下にして右手に海の中道、志賀島へと続く緑の環、左手に香椎、松崎、土井の緑の塊。その間に市街地が広がるが、いま東区は再開発のプロジェクトがめじろ押しである。

まずは箱崎地区。JR鹿児島本線の高架化と沿線の区画整理が進行中で、昨秋下り線の高架が完了し駅舎は九大側に440㍍移動して仮開業した。当地区では国の計画に従い平成17年から九大が順次西区へと移転する。その跡地の活用策はこれからだが、箱崎ルネサンスの対話も進んでいる。

和白では新宮駅前の工場跡地が住宅開発され駅舎の改築に併せて市が地域交流センターを開設する。いずれも東区の拠点でありながら鉄道により街が分断されてきた地区で、市民の期待は大きい。このほか香椎地区では国道3号線のバイパス建設も進んでいる。

さて、立花山眼下の博多湾。海面下、香椎の沖合には水深14㍍、幅400㍍の航路が玄界灘に向かって完成しつつある。博多が古来貿易で栄えたことは有名だが、今も有数の貿易港であるのは意外に知られていない。

博多湾の水深は浅く、港湾の整備は明治以降の先人たちの悲願であった。アイランドシティ（人工島）の整備はその延長にある。航路の造成により生じた浚せつ土砂を400㌶の島として再生させているのである。昨秋この島をまたいで海の中道への道路が開通し、この島が市民の眼に触れ親しまれる機会が急増した。

また、足利尊氏ゆかりの多々良川。新宮町を除く粕屋郡の水はすべてここに流れ込む。流域の下水道整備が進み、シロウオとともに清流が戻りつつある。隣接町との交流の中で共に親水性を高めていきたいと思う。

「立花山の曙に、多々良河畔の夕まぐれ…」。応援歌に謳うとおり、東区は歴史と自然に恵まれた街でもある。

福岡市の北東には北九州市がある。競争から共生へ、両都市圏の相互補完と連携の強化は今やお互いの基本戦略となった。両都市圏の回廊に位置する東区の役割は、なお一層重要になることを予想する。

なんばよつばとし

メーリングリストfukkou19
学校時代にも増して親しい関係づくりに威力

豊田　拓男（高19回）

高19回卒は「fukkou 19」なるメーリングリストによって広く情報を交換し合っています。

始まったのは２０００年６月。同窓会の案内状発送や出欠確認などに苦労を重ねてへたばった幹事団が、同窓会後の３次会で、もっと安い費用で簡単に作業できる方法はないものかと、酔眼を回しながら話し合ったのが発端。現ホームページ管理者が、その翌日にはYahooのeグループに無料のページを探し出し、直ちに「fukkou 19」と命名して７名のメンバーを登録。この「先覚者」たちによる熱心な勧誘の結果、芋づる式に加入者が増え、昨年10月にはメンバー数はすでに110名を超えました。実に卒業生の５人に１人が加入している計算です。

開設してちょうど１年で通信量は千件を突破。この時はメンバーの航空会社支店長から、１年間の発信件数の上位３名（圧倒的１位のご当人を除く）に韓国往復の無料航空券がプレゼントされ、自費参加者も加わって、大勢が元気よく韓国の団体旅行を楽しみました。

２年と３カ月目の昨年９月には発信件数は３千を超え、グループ内の情報のやり取りは衰えることを知りません。

ホームページの表紙を見ると、月別の投稿件数が表になっており、すべての投稿が保存されていて、いつでも読めるようになっています。それをざっと眺めると、常連投稿者は海外勤務者も含め約15名。中には日記代わりに投稿しているらしい御仁もいて、日ごとその名を見ずということなし。よく見ると、メールアドレスが２つあり、自宅でも会社でも、とにかく投稿するつもりのようです。

とき折、という感じの投稿者が50名弱。あとは沈黙の読者層というべきか。全員が熱心に読んでいるかどうかは分かりませんが、集まりなんかで会うと投稿内容が話題になって話が盛り上がりますので、結構楽しまれているかのようです。

このメールグループの一番の利用価値は、何といっても連絡の速さと広さ。お陰で、昨年の５月に久住高原で実施した卒業35周年の記念合宿旅行（**写真**。参加者61名）を始め、福岡と東京を中心に盛んに集まりが催されるようになり、同期生関連の店々を中心に地域の消費経済の活性化に大いに貢献しています。

「あんたたちゃ、月に何回同窓会するとね？」と、少なからぬメンバーが配偶者に呆れられているようであります。

また、実際の役に立つ情報交換が出来るのもメーリングリストのメリット。みな同年齢で共通点の多い立場ですから、情報や協力求むの連絡を入れれば、それこそ打てば響くような反応が返ってきます。趣味、病気、仕事関連、お勧めの店、ボランティア募集などなど。中には、直ちに関連ありそうなホームページを貼って送信してくれる人もいて、情報収集に関しては便利この上なし。みな五十路半ばにさしかかり、ギラギラしたところが次第に影を潜めて、いささか同情心や利他心が深くなってきたかもしれません。

「fukkou 19」には写真アルバム代わりの共有フォルダもついていて、何か行事があると、その際の写真を収めるようにしています。これを見ていると、かつての美少女、美少年の変わりようにに深い感慨を覚えることがあります。

親切でかゆいところに手の届くページ管理者、高校時代同様、何かというと行事を企画し、取り仕切ってしまう元総務、副総務。それに各方面から話題を提供する投稿者たちによって、高19回生は学校時代よりもずっと親しみのある関係を作りつつあります。

お陰で、昔は顔も知らなかった同期生の興味深い人となりを知ったり、今売り出し中の美女タレントが旧友のお嬢さんだと分かって驚いたりと、メーリングリスト「fukkou 19」は様々な話題で毎朝のページ訪問者を楽しませています。

会員制のページなので、他の学年の方に覗いていただけないのが残念です。

踊り子さんよりお吉さんより
やっぱり福高の友達さ！
高２回生東京同窓会・伊豆旅行の記

ここ数年、「福高２回生東京同窓会」は、貸し切りバス利用の１泊旅行が定番だ。一昨年は冬景色の磐梯・猪苗代湖だったが、昨年は一転して春の訪れが早い伊豆半島一周の旅を楽しんだ。

例年、参加者の数は20名を若干超える程度、関西や福岡からも駆けつけている。昨年、平成14年は首都圏組が13名、関西から１名、福岡から７名の計21名だった。

３月３日、バスは東京駅を出発、福岡組を迎えるため羽田空港に寄り東名高速で御殿場へ。すると、忽然と現れたブランドショップ街。そして、箱根大湧谷、箱根神社、十国峠を経て河津に至る。暖かった昨年は、既に盛りは終わっていたが、柄にもなく、あわよくばもう一花と、まるで我らの気持ちを代弁するような早咲きの河津ザクラを見る。

宿は南熱川東映ホテル。道路を挟んで渺々（びょうびょう）たる太平洋。伊豆大島、その先に年増のオッパイよりしゃんとした形の良い利島（としま）が見える（少々品位を欠きますが、どうか平にご容赦を！）。

夜の宴会は、懐かしい夢のような少年時代の話から、前立腺やバイアグラなど身につまされる話までいっぱい。K君提供の東京カムバック挨拶の刺身船、福岡組が持参した大賀酒造の新酒などもあって、大いに盛り上がった。宴会後のカラオケは、トッパイことA君の独演会。他は刺身のつま。

翌日は、西伊豆海岸を走った。途中見事な「らんの里堂ヶ島」を観賞（**写真**）し、沼津インターから一路東京へと向かった。

今回、常連のS君が体調のせいで不参加。K君も持病の糖尿病をいたわって不参加。彼の「一つ出たホイのやっさホイのホイ」が出なかったのが淋しい。

このところ、東京組の減員を福岡組がカバーする格好になっているが、東京在住の諸君はもちろん、福岡や関西からの参加を心から歓迎している。

（報告・福岡から参加の斎藤裕三）

数学劣等生の恨み節？
「福中卒なら優秀」と見込まれ
創業社長にしごかれる

福園　一成（中学26回）

校長の大温情で福中生に

昭和22年、旧制福高受験に落ちて、鹿児島の川内中学から福中5年への転校試験を受けた。当時の今井校長から「なにができなかったか分かっているか…」と問われた。すぐに「数学です」と答えると「分かっているなら合格させてやる」。なにか珍紛漢というか大温情で福中生となった次第。

福中卒が10年後、運命を大きく変えることになる。昭和34年に大阪商事（現新光証券）を経て、現在の立花証券に転職する際、創業者の石井久社長（現取締役相談役）が「ウーン、福中出身か、福中出身なら優秀だ、うちの調査部を立ち上げてくれ」と即決。後で知ったが、石井氏は福岡市の近くの大野城市出身。家庭の都合で高小卒で実社会に出て、昭和28年に証券会社を創業して6年後の35歳、小生28歳の時であった。

福中卒ゆえのシゴキ

石井社長の「福中卒なら優秀…」の思い込みゆえか、大変なシゴキが始まった。各方面への取材に同伴させられ、そしてレポートの提出、討論のくりかえし。「君の記事は難しすぎる。学者先生のレポートじゃない。お客さんの八百屋や魚屋のおかみさんでも分かるような記事を書け…」と幾度も注意される始末。

また、突然「どこそこの会社の資本金と売り上げ利益は」と質問が飛んでくる。会社要覧に手を伸ばそうとすると「モー、イーイー」と、即答できないと1週間モノを言ってもらえない。仕方なく会社要覧をマル暗記せざるをえない（当時の上場会社は現在の5分の1ぐらい）。お陰でお客さんからは「君はよく知っているなあ…」と、株の注文が増える好回転。毎日が数字の連続で、福中時代の数学の劣等生がどうにか生きのびられた。

福中・福高卒"加油"

これも入社早々のころの話。石井社長がゴルフを始めた（3年後にはハンディ4に）。ある日、私の方を見て「君はゴルフはダメ」のご託宣。不審な顔をすると「君は金も暇もないはずだ」。なるほど…と、納得しながらも「日曜日はすることがありません」とやり返す。「決まってるじゃないか勉強、勉強」。福中卒に感謝すべきか恨むべきか……。

ゴルフの許可が出たのは社長を拝命した昭和63年、私の58歳の時。以来、70歳を超え会長となった今も、なぜか、始めた年齢の半分の29でハンディは止まったまま。石井オーナーは「僕は下手とはゴルフをやらない」と、いまだにゴルフの付き合いは皆無の状態。

証券業は勉強がすぐ実績につながる職業である。特に国際業務ではレベルが試される。20数年前、フランスの銀行で「日本のこれからの技術はエレクトロニクスとバイオテクノロジーで人間の本質に迫る…」とまくしたてた。「日本を中心に世界が動くような話だ。日本人はまだ天動説を信じているのか」と相手はカンカン。フランスはカトリックの国。人間の本質云々が癇にさわったらしい。

そこで、宗教を知るため、森本哲郎氏の『そして文明は歩む』を読み、目から鱗……。

日本の学校教育で宗教、民族、そして文明・文化のかかわりを教育しておかないと、日本はグローバリゼーションの捨て子になりかねない。

福中、福高卒健児、淑女よ、加油（中国語ヂアヨウ＝頑張れ）。

ハトのふん害に
ちょっと憤慨しながら
ベランダのひなの
巣立ちを見守る

岩瀬　智子（高39回）

東京に暮らして16年、小さなベランダのあるマンションに住んで10年になります。朝出勤して夜遅く帰ってくる「規則正しい生活」は空から飛来するハトたちにとって絶好の条件らしく、毎年春から秋にかけてベランダには着々と「落とし物」が増えていきます。

初夏のある休日の朝、惰眠をむさぼっているとつがいで遊んでいるような甘えた鳴き声がしてきました。いつもなら聞き流すのに、最近のふん害が派手だったので文句の一つも言ってやろうと飛び起き、ベランダに向かいました。カーテンを開けた私の目に飛び込んだものは、親から餌をもらっているハトのひな鳥！　1羽と思いきや、後ろからもう1羽!!　クルックー（絶句）。

昨年の東京は猛暑で、クーラーをかけずに寝ると寝不足になってしまうような日が続きました。例にもれず、私もクーラーをかけて寝ていましたが、熱をもった室外機の下でひなが死んだら困ると思い、その日からクーラーをとめました。また、室外機のそばに湯沸かし器のスイッチがあるので、親鳥が見張っているときは邪魔しないようにこちらが気を使い、水風呂でがまんしました。「ハトの恩返しがあったりして」などと、ちょっぴり期待していましたけれど、ふんしかくれませんでした。

そんな迷惑なハトでも、ひなの行動はかわいいものがありました。親鳥が餌をもってくると口を大きく開けてチイチイと鳴きます。しかし、私がベランダの戸を開けたときには、2羽ともぴたりと鳴くのをやめ、しっぽや頭が室外機の陰から出ているにもかかわらず、視線を避けるかのようにしてじっとして動きません。そして、運悪く私と目があった時に見せる、はたはたと困っている姿もなかなかユニークだったので、滅多に見ることのできないひなの成長を楽しく観察しました。そして、羽もそろい、無事お盆前に巣立っていきました。

サケが故郷の川に帰るように、ハトも生まれたところに戻ってくると聞きます。ハトの成長を眺めるのは嫌いではありませんでしたが、やはりふん害は困りものなので、ベランダの手すりに釣り糸を張るという方法を実践することにしました。まずは手すりのふんを取ってからと掃除をはじめたところ、室外機の下でかすかな物音がしました。

またしても！　白い卵をそばにおろおろしている親鳥を見つけてしまいました。ハトとの戦いはまだまだ続くようです。効果的な撃退法をご存じの方、ご教示願えませんか？（さし絵は、昨年の那須良輔諷刺漫画大賞のグランプリ受賞者で和歌山市の漫画家ハシヨシヒサさんに協力いただきました）

福友会ゴルフコンペ報告

ご参加をお待ちしてます

5月（第14回）、11月（第15回）と、2回コンペを開催しました。場所は立川国際カントリークラブ。両日とも晴れ、無風の素晴らしい天候の下でプレイができました。14回は師岡一夫さん（高2）、15回は小野塚満郎さん（高16）の優勝です。

コンペの参加者は14～15人、年々、高齢化しています。11月のコンペでは、年長の長澤修さんは中26の卒業の73歳、佐藤良博さんは高1の卒業、60歳代でゴルフを始め、友人が増え楽しい、次回も必ず参加すると、張り切っておられました。

OB、現役にかかわらず、ゴルフの好きな方、ぜひご参加ください。新年度も5月、11月の2回、開催予定です。連絡は幹事の案浦傅（高2）、小野塚（高16）まで。

今どきの高校生と教師の間

浅くて狭い溝の向こうに不安の中で「大丈夫？」を連発する若者たちが

緑川　あつ子（高27回）

横浜市の教員になって23年。市立南高等学校に転勤して5年を迎えました。「ナンコー」の呼び名で地元に親しまれている、今年創立50周年を迎える学校です。男女比が7対10弱で、女子の力が実際の数以上に圧倒している感があります（これは、近年どの高校にも見られる傾向のよう）。

遥か昔の高校時代の私と、今を生きる高校生。時代と地域は違っていても、底にある不変のものと、変わってしまったものとがあります。南高生を通して見えるものを少し話したいと思います。

驚くほど確認したがる「相手にとっての自分」

「ミドティ、俺（私）だいじょうぶかなぁ……」。何度この有声無声の言葉を聞いたことでしょう。

「ミドティ」とは私の南高校での呼称です。ミ・ド・リカワ・ティーチャーの略です。何でも略したがる若者言葉の一例でしょうか（そう言えば、我々の高校時代も、恩師をあれこれ呼んでいましたネ。懐かしい名前を思い出します）。自分の時代と決定的に違うのは、その呼称を面と向かって使わなかったなあ、ということ。

「砕けた呼び名を使うことが親愛の情を表している」というのが、彼らの論理らしいです。大人との距離を、言葉や態度の砕け具合で測っているのが見受けられます。砕けているということは、気持ちが近いということだから、と。

そして、親愛の情を示した後に相手に望むのは、自分の“ポジション”を「言葉で表して欲しい」ということ。だから、「大丈夫かな？」を多用する。言葉はない時でも、その態度や雰囲気で、子猫が母猫を見上げるように、目に見えない尻尾をパタパタと振っている大型犬が「よし！」を待っているかのごとく、期待の眼差しが私に向けられているのを感じます。生徒の誰よりも背の低い私は、頭上20センチからの視線に、その時に発すべき言葉を探します。

友人関係、学力、恋愛…高校生を取り巻く悩みは多々あります。そして、彼らは驚くほど「相手にとっての自分」を確認したがる。友達から、大人から、「大丈夫だヨ」という「言葉」をもらって、やっと安心する。

「自分がそう思うから、それでいい」は「理想」ではあるけれど、自分でそう出来るかと言えば、自信がない。

幼い頃から、「目で見る形・耳で聞こえる形」で表すことを是として育ってきた子供たちにとって、「見えないもの・聞こえないもの」を通して物事を判断することは、恐ろしく不安なことなのかも知れません。自分が言って欲しい言葉や数字を受け取って、やっと安心するのです。

「大丈夫だヨ」「その方が良いと思うよ」「相手もそう思っているのでは？」……その言葉を受け取った時のほっとしたような表情を見るにつけ、その子の心の不安さを感じられ、切なさと少しの苛立ちを感じることがあります。特に、一昨年は3年生の担任だったため、生徒たちは殊更不安だったのかもしれませんが……。

一人で乗り越えるべき。昔は他の人に、ましてや教師になんか、そんなことを聞かなかった。――そう思われる方も多いでしょう。

私自身、高校時代、級友ましてや大人にそんな問いなどするという発想は無かったものです。ですが、今の子供たちは、成長過程で、自分で考え判断していく気持ちを、けっこうスポイルされてきているのではないか、と思うことが多々あります。

与えられる情報は膨大で、しかも「見える形」のものが多い中、自分の中に絶対的な価値基準を形成することは、とても大変なことのようです。背中を押してくれる一言があれば、一歩踏み出すことが出来る。その一助の方法に賛否両論があることは分かりますが、毎日のようにどこかで発っせられる彼らの言葉を、今改めて考えています。

「オハヨ」「元気？」「だいじょうぶ？」「おやすみ」……高校生の必需品とも言われる携帯。互いにメールでこれらの他愛もない言葉をやりとりしているのも、言葉で誰かと“繋がっている”ことへの確認行為であると言えます。

生徒と教師の間には、深くて暗い溝がある。なんて、斜に構えていた昔の高校生は、今、その溝が浅く狭くなっていて、その狭間になんとも心細い橋が架かっているのを感じています。向こうには、わがまま・自己中心と言われる今どきの高校生が立っています。自信たっぷりのようで、子供たちは心の中で呟いていることは多いのではないでしょうか。

「俺（私）大丈夫かなあ？」

関西だより

楽しい７つの同好会発進中！

三浦　元（高11回）

我が関西地区でも近年新しい動きがある。

まず、平成13年11月に立ち上げたホームページ。高28の岡部和也氏らの尽力による。アクセスも1年を経て１８００件になる。情報の伝達法として今はまだ微力だが、将来は必須となろう。

サイトも、お知らせ、会長室、資料室など10を超える。懐かしい校歌が聞ける音楽室も。アドレスは http://kfmhs.hp.infoseek.co.jp/

次に同じ13年末より以下の7つの同好会が発進した。

ゴルフは、どんたく会として長い実績を持つ。修猷との年1回のコンペを行っており、昨年のコンペでは、高13の藤波賢典氏がホールインワンを達成。県人会とのコンペも実施している。（世話人・高5・杉原行幸）

囲碁の会は、6段の合屋嘉人会長（中20）を擁し、月1回を定着させた。毎回県人会等よりゲストを招いている。終了後のパーティが楽しい。12月には修猷との対抗戦も実施。（世話人・高13・桑野知泰）

歩こう会は、ほぼ2カ月に1回、近畿一円の低山を登っている。今までのところ、葛城山麓広川寺、雪の金剛山（写真）、真夏の比良武奈ヶ岳、初秋の大和三山、紅葉の貴船―鞍馬山（温泉も）。県人会とは毎回合同で酒宴も盛大。（世話人・高11・三浦元）

歩こう会の金剛山雪中登山（左端が筆者）

野鳥の会は、双眼鏡片手に葛城山麓広川寺、草原の平城宮跡、生駒山麓枚岡公園、水鳥の天国・伊丹昆陽池、アション原の淀川河畔牧野地区など巡った。（世話人・高6・松岡幹郎）

旅行の会は、昨年9月に県人会の人も招き淡路島を訪れた。壮大な明石大橋、歴史をしのぶ高田屋嘉兵衛公園などを散策。なかでも大鳴門橋を一望しながらの露天風呂は圧巻だった。（世話人・高5・松浦昭男）

山野草の会は、春と秋に茨木周辺の里山で観賞と採取。特に5月の摘みたての野草の天ぷらの旨さにはみな感動した。（世話人・高16・佐藤光男）

テニスの会は、春の大阪・泉北の素晴らしいコートで豪快に打ち合った。目下メンバー拡大中。（世話人・高12・柴田忠良）

いずれの同好会もまだ広がりが不十分で、合屋氏が会長を兼務する福岡県人会の人たちと交流しながらやっているのが実情である。

最後に、恒例になった夏の夜のビールパーティ。昨年も大阪駅近く梅田で多数を集めて痛飲した。

新横浜ラーメン博物館の立ち上げをプロデュース

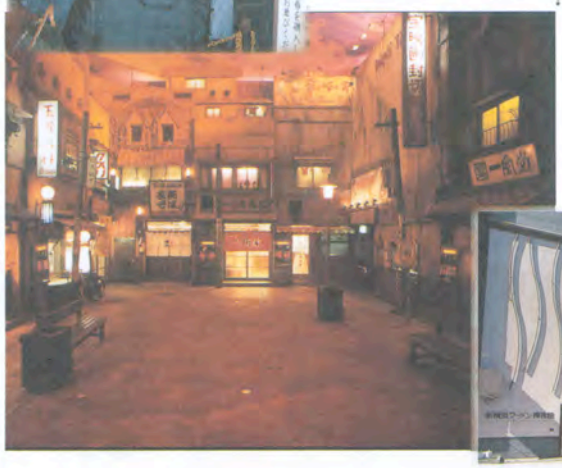
出店してもらう「美味」を求めて全国500店以上食べ歩き

中村　淳（高31回）

新横浜ラーメン博物館（横浜市港北区、ＪＲ新横浜駅から徒歩５分）という施設をご存知でしょうか？

全国のラーメン名店を一堂に集め、その美味しいラーメンを更に美味しく食べていただくアトモスフィアを醸成するために、昭和30年代のノスタルジックな街並みを再現した施設です。

94年のオープン当時はかなり話題にもなり、10年近く経過した現在でもオープン当時を上回る勢いで集客しています。カレー・ミュージアムや餃子・寿司などをテーマにした類似施設の先駆けとして、よく引き合いに出されているようです。



新横浜ラーメン博物館の外観と内部、そしてにぎわい

私はプロデューサーとして、この施設の立ち上げに関わらせていただき、実際オープン当時のラーメン店８店舗の出店契約には全部立ち会ったのでした。

プロジェクトが立ち上がったのが91年の10月、８店舗目の「一風堂」さんに契約いただいたのが93年の４月頃だったと思いますが、その間の１年半余りは、ひたすら全国各地を回わってはラーメンを食べまくり、そのラーメンが美味しかったら、店主に時間を取ってもらって、企画を説明し出店を促すことが、私の仕事だったのです。

現実的には、「美味い！」と思って、店主に時間を取ってもらうのは10店に１店の割合だったでしょうか。つまり、１年半、私はひたすらラーメンを食べ続けることのみが仕事だったといっても過言ではないのでした。

その間のことを、ちょっとダイジェストしてみましょうか。

●このプロジェクトで訪れた最北端が旭川、最南端が鹿児島、その間食したラーメン店は500軒以上。

●１日に最も多く食べたのは７杯。

●何度もお邪魔したのは、現在も博物館で営業していただいている「すみれ」さん。当時はなかなか出店をＯＫしてくれず、結局30回ぐらいは通ったと思います。

●この１年半で増えた私の体重は18キロ。プロジェクト終了時に過激なダイエットに挑み、１カ月半で15キロ戻しました。

門司の「絶品」は出店叶わず「まぼろしの味」に

ところで、このプロジェクトで様々なラーメン店と出合えたわけですが、何処が一番美味しく感じたかと聞かれれば、出店していただいたお店以外だったら、躊躇なく、私は門司にあった「民子ラーメン」さんを挙げます。九州男児としてはぜひとも出店していただきたかったのですけれど、諸般の事情で叶いませんでした。

今も営業しているのかどうかも定かではありませんが、私が知る限り、他店との類似が全く感じられない独特で、一口すすれば「絶品！」と叫ばずにいられない味は、私の筆力では到底再現不能です。ラーメン博物館に出店していただいて、一人でも多くの人に、その「まぼろし」の味を堪能していただく機会を作れなかったのが今でも心残りなのでした。

「福高体育祭」のあの必死さ、素晴らしさを思う

高江　誓詞（高48回）

福高体育祭。卒業してもうすぐ７年になるが、高校時代、応援団に所属していた私にとって、体育祭への思い入れは一際強い。加えて昨年のそれは、別な意味からも特別な感があった。

というのは、弟が体育祭で団長を務めたのだ。７月に帰省した時、弟から「体育祭の団長に選ばれた」と聞き、非常に驚いた。同時に、福高のお陰で弟もずいぶん成長したな、とうれしくなった。「がんばれよ！」と励まし、東京に戻った。

それから２カ月、体育祭当日は残念ながら私は用事で見に行けなかったが、10月に学会が福岡であった時にビデオを見せてもらった。

ビデオから私は何か迫り来るものを感じた。以前に味わったことのあるものだ。皆が必死になっている姿、学校が一つになっていく様子、今も福高のよき伝統が受け継がれていた。応援団としての最後の晴れ舞台だった自分自身の体育祭と重なり、とても懐かしかった。そして、福高の体育祭はこんなにすばらしいものかと驚いてしまった。

現在、私は大学院の修士１年、日々研究生活を送っている。一生懸命がんばっているつもりだったが、あのビデオを見た時に改めて何か大切なものを思い出した気がした。あの時の必死さだ。自分自身、そして皆があの時のように必死になって取り組めば、今の日本は変わるとさえ思った。

福高で高校時代を過ごすことができて本当によかった。卒業してその良さが本当の意味で分かった気がする。自分の応援団での活動も含めて福高での経験は、他では決して味わえない貴重なものだったと思う。

私の人格に計り知れない影響を与え、今も心の中にしっかりと根付いている。

これこそ、まさに福高魂だと思う。それは、卒業して皆それぞれの道を歩んでいっても、心の中にいつまでも残っているものなのだろう。弟の体育祭のビデオを見ていて、そう強く感じた。そして私自身、新たな気持ちで自分の道を歩んでいこうと決意を新たにした。

編集部からお知らせ

故熊野先生の「記念画集」ご購入の案内

美術の故熊野礼夫先生の遺作展が平成13年に開催された際に「記念画集」が発行されましたが、残部が20冊程あります。

ご希望の方は左記へお申し込み下さい。

●問い合わせ先
福岡高校同窓会事務局
℡092-641-7258

●頒価３５００円（送料込み）

●支払い方法郵便振込
「福高同窓会」０１７１０-３-８９３２

★同好会設立を支援

関西同窓会には、８ページでご覧の通り、ゴルフ同好会、歩こう会、野鳥の会、山野草の会、テニス同好会、旅行の会、囲碁同好会があり、盛んな活動により同窓会の活性化に貢献しています。東京には目下、ゴルフ同好会の「福友会」のみです。同窓会は、同好会の設立を積極的に支援します。同好会でいっそう会員相互の親睦を図って下さい。

同窓会総会は４月25日(金)

41回卒・杵屋佐助さんの長唄三味線など“文化の薫りがする催し”いっぱい！

当番幹事　築地　英子（高30回）

色々な希望に満ちて迎えた21世紀もすでに３年目に入り、改めて時の流れの早さを感じずにはいられません。昨年も実に様々な出来事がありましたが、近くて遠い国より20数年ぶりに故郷に戻られた方たちが、同級生や旧友たちに迎えられ、肩をたたき涙を流しながら再会を喜び合う姿は、強く印象に残りました。

さて、昨年の５月に前任の皆様から幹事を引き継ぎ、経験豊富な高10回、20回の諸先輩、フレッシュな40回生、そして私たち30回生が、本年の総会にご来場いただく皆様に、楽しい時間を過ごしていただけるよう、準備を重ねています。そのため、我々が直接顔を合わせる幹事会以外にもインターネット上に福高０（ゼロ）会のサイトを立ち上げ、常時意見・情報を交換し、きめ細やかな打ち合わせを行っています。

また今回のことをきっかけに、私たち30回生は東京において初めての同窓会を昨年９月４日に開きました。

長い間、同じ関東の空の下にいながら、卒業以来実に24年ぶりの再会となった友人が幾人もいました。

アルバムを囲んで当時の懐かしい話に花を咲かせていくうちに、これまでの空白が嘘のように塗りつぶされ、あっという間に少々(!?)「“とう”のたった福高生」に戻ってしまったのでした。

そして、その場で総会準備について「出来ることはするけん！」と言ってくれる人、その時の情報交換で新たに準備に加わってくれる人が増えたなど、改めて同級生の結びつきの深さをありがたく感じる集まりになりました。

そこで、今年は、“文化の薫りがする催し”を柱に据え、福中・福高の同窓生で文化・芸術的な活動をされている方々を広くご紹介しようと計画しています。各学年幹事の皆様による情報の提供や同窓会名簿をたどることによって、実に様々な分野で活躍されている方たちの姿が浮かび上がり、今さらながら福中・福高生の多才ぶり・底力を実感している次第です。

来る４月25日（金）、恒例の会場、市ヶ谷のアルカディア私学会館での総会では、まず若手邦楽プロ演奏家として舞台やテレビ、ビデオなどで幅広く活動されている、四世・杵屋佐助氏（高41回、本名・楢崎靖之さん）による長唄三味線の演奏を幕開けに、スペイン・バルセロナのサグラダ・ファミリア教会主任彫刻家の外尾悦郎氏（高25回）による、東京同窓会へのビデオメッセージの披露等を予定しています。

また、この日の記念になるよう当日会場限定の企画も用意しています。何が出てくるかは参加していただいてからのお楽しみ！　とさせていただきます。

春のひととき、年に一度福中・福高生に戻ってみてはいかがでしょうか。幹事一同、皆様のお越しを心よりお待ちしています。

平成14年度総会・懇親会報告

「出会いはここから いつも青春」そのままに

中村　英樹（高29回）

平成14年４月19日、同窓会当日は朝から爽やか陽気となりました。昼過ぎには高９、19、29、そして39回の当番幹事や各回の応援部隊が会場のアルカディア市ケ谷私学会館に集まり、最後の準備を忙しく済ませて夕刻からの総会に臨みました。

福岡より小林彰同窓会会長、北島龍雄新校長はじめ４名、関西からは大住旦生常任幹事長を来賓としてお迎えして総会の開式。校歌斉唱後、これまで東京同窓会をまとめて頂き、平成13年秋に亡くなられた故三野定会長（中15）ら、旅立たれた先輩や友へのお別れの黙祷が行われました。会は粛々と進み、新しく名誉会長に就かれた草場良八氏（中22）の挨拶で、皆が新しい気分を持ち閉会、舞台を懇親会へと移しました。

鏡割りには来賓方や草場名誉会長と共に中６の狩野三郎氏が最高齢者（93歳）として参加頂いて懇親会はスタート、総会の緊張感から和やかな雰囲気と変わりました。急ぎ仕事を終えて駆けつけた多くの同窓生たちで会場が賑やかになった頃、今回の目玉企画《福高いまむかし　恩師の声》のビデオ登場！

これは高31回が制作した福中誕生から現代の福高に至るまでの歩みを綴った記録を背景に、我々がお世話になった恩師に福中・福高に対する熱き思いを語って頂き、そのご様子を収録して紹介したものです。今回は５名の恩師が登場、お世話になった先生方のご様子がスクリーンに現れる度に会場に歓声が沸きました。更に宴もたけなわ、平成13年の福高体育祭と高28回の鶴田孝介氏が撮影した福高グラフティの映像《学舎》に、会場の350名を超える皆さんの福中・福高への思いは最高潮を迎え、まさに懇親会のテーマ『出会いはここから　いつも青春』そのものでした。

会場に博多弁が飛び交い熱気に包まれた中、全員での応援歌の大合唱、博多祝いめでたと続いて懇親会はお開きとなりました。都心の一カ所だけが「堅粕の街」に変わった一日でした。

なお、会場受付では高17回の中村哲医師が活躍するペシャワール会の紹介とともに募金をお願いし、東京同窓会では初めてでしたが、同窓生の多くのご厚意で10万円近い募金を集めることが出来ました。紙上を借りて御礼申し上げます。

◇◇編集後記◇◇

◆ペシャワール会の会員数は同時多発テロ前の約３倍。この会員が定着するかどうか。同窓会の支援が定着してほしい。（齋藤・高16回）

◆広報委員の皆さんの取材力にはほんとに感嘆するばかり。年々いい話がどんどん掘り出されてきて楽しみです。（原口・高15回）

◆人生の最大の喜びは良き出会いを持つことだと思う。本紙の編集作業に参加させてもらって改めてそれを実感する。（福士・高14回）

◆昨年はホームページを何とかしようと思っていましたが、あっという間の一年でした。今年こそと……。（加藤・高15回）

◆やさしさと謙虚さ。名をなす研究者の資質の最大要因の一つは絶対にこれ。と、松重君のインタビュー中に痛感。（久能・高18回）

◆今回、担当記事は無かったが、若い後輩を半ば強制して広報委員に引っ張り出せたので少し役に立ったのかな。（上田・高22回）

◆昨春から東京勤務となり右も左もわからないまま生活を始め、気がついたら何故か先輩方の隅っこで編集作業に参加していました。福岡を離れたのも初めてで、今更ながら福岡の良さを痛感し、遅ればせながら愛校心が芽生えてきた今日この頃です。（新川・高36回）

URL http://netpassport-wc.netpassport.or.jp/~wfukkou